

共に渡来

1. ラミーカミキリ

小型ではあるが魅力的な配色のカミキリムシです。漆黒と白色の境界がはっきりし、独特の模様となっています。前胸部の背面は白色に2つの円い黒点があり、パンダの目のようです。

後出のカラムシと結びついているため見つけることは容易ですが、成虫の見られる期間は短く、時期を失わないことです。カラムシの葉の表面にいますので分かりやすく、逃げてもあまり遠くまで移動しません。ただし、驚くと脚を縮めて落下するので見失ってしまいます。成虫は茎や葉をかじり、幼虫は茎の髓を食べます。



カラムシの仲間のラミー(ナンバンカラムシ: 東南アジアから中国で栽培されている)を食べることから名付けられた外来種です。幕末から明治にかけて、繊維をとるために持ち込まれたラミーにともなって侵入したと考えられています。今では西日本で普通に見られる昆虫になってしまいました。暖地性の種ですので、本来は西日本だけに見られたのですが、近年の温暖化で北へ分布を広げています。

2. カラムシ

イラクサの仲間、少し湿った道ばたや草地に見られます。茎の皮から繊維をとるために栽培もされていましたので、史前帰化植物ではないかともいわれています。苧麻(ちよま)など呼び名も多く、『日本書紀』にも栽培を奨励する記述があります。



地下茎が発達し、いくら刈り取っても再生してくる強い雑草です。打吹山では谷筋や公園部分の草地の優占種です。2m近くにまで茎をまっすぐ伸ばし、よく目立ちます。皮を蒸して剥ぐことからカラムシと呼ばれます。繊維が強く、簡単に剥ぐことができます。この繊維は柔らかで、麻よりも高級品です。「越後上布」や「小千谷縮」はカラムシ

を原料とする夏衣用の織物で、重要文化財にも指定されています。

葉の裏に毛があって白く見えるものから、毛がなくて緑色をしたアオカラムシとよばれるものまで、段階的な違いがあります。ラミーとの雑種もあるといわれています。

